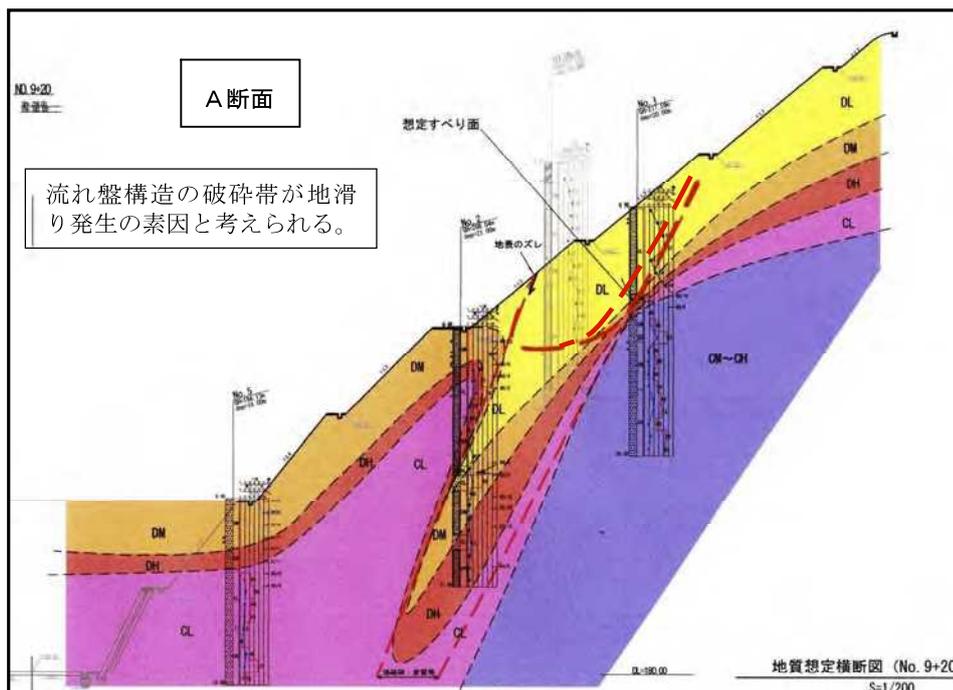
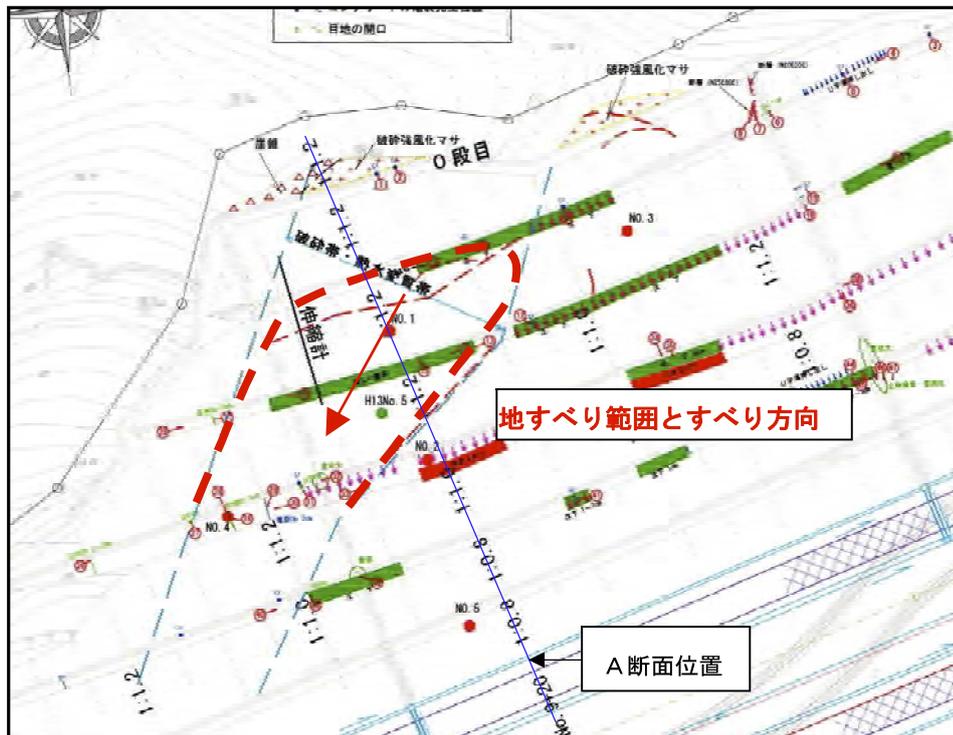


### 5.3 地すべりに対する考察

#### (1) 地すべりの想定範囲とすべり方向

下図に示したように、最も軟質な地盤と考えられる「破碎帯・熱水変質帯」の範囲内において、赤の破線のようなすべり形状が想定される。これは、No. 1 孔のパイプ歪計に変動が見られ、No. 2 孔でほとんど変動が見られないことから容易に推定される。すべり方向は図中に示した矢印の方向（南西方向）と考えられる。その他の区間にも多くの変状が見られるが、明瞭な地すべりとしての範囲を特定することが困難であり、全体として法面表層の緩みが発生しているものと考えられる。



## (2) 地すべり発生機構と今後の留意点

前頁に示した、破碎帯内部の地すべりについて、素因としては当然ながら幅の広い「破碎帯・熱水変質帯」の存在であり、その分布構造が施工法面に対して斜交してはいるものの、傾斜方向が谷側の「流れ盤構造」を成していることが大きな影響を及ぼしているものと考えられる。

熱水変質による粘土化および破碎による粘土化が進行している中で、流れ盤構造がすべりの発生確率を高めているといえよう。

誘因としては、高強度の降雨による影響が最も大であろうが、それ以外として、上記した当地の分布地質が「粘土化の見られる強風化粗粒マサ」であることより、切土後の応力開放によって急速な劣化（地盤の緩み）が発生しやすい地質であることが考慮される。このことは、破碎帯範囲内の地すべりのみならず、それ以外の法面表層の多くの範囲で何らかの変状が発生していることから想定されるものである。従って今後の対策としては、上記地すべり区間のアンカー工も必要と思われるが、法面全体の補修工を施工する際には出来るだけ早急な表面（法面頭部を含む）保護を施すことが重要と思われる。補修工としては、基本的に変状箇所の成形を行うとともに、上部斜面からの雨水浸透を防ぐための最頂部モルタル保護や側溝を設ける等が考えられる。

なお現在設置中の伸縮計およびパイプ歪計は、今後も可能な限り観測を継続し、地盤動向を常に把握しておくことが重要であろう。

— 以 上 —